

JAMS 結成 20 周年記念企画シンポジウム

「ヤスミン・アフマドにみる映画とマレーシア——グローバル的混成社会における大衆文化」 趣旨説明・報告要旨

趣旨説明

今日、日本の映画業界や映画ファンのあいだで映画を通じたマレーシアへの関心が高まっている。とりわけ、6つの長編作品を遺して2009年7月に急逝したヤスミン・アフマド監督の作品は多くの人々に注目され、特に遺作となった『タレントタイム』（2008）は、アジアフォーカス・福岡国際映画祭（2009年9月）、「ヤスミン・アフマド監督作品特集」（2010年8月、アテネ・フランセ文化センター）、「ヤスミンの世界—ヤスミン・アフマド監督レトロスペクティブ」（2011年7月、ユーロスペース）、東京国際映画祭（2011年10月）での上映をはじめ、日本各地で上映会が催されている。ヤスミン作品を通じてマレーシアにはじめて触れたという人も多く、今や『タレントタイム』などのヤスミン作品を抜きにしてマレーシアを語る事が難しくなっていると言っても決して言い過ぎではない状況が生まれている。

ヤスミン監督やヤスミン作品を題材としたシンポジウムやトークショーはこれまでに各地で催されてきたが、日本マレーシア学会（JAMS）の連携研究会であるマレーシア映画文化研究会が主催する本シンポジウムでは、マレーシア映画の現況を捉えたいというので、映画史とマレーシア社会のそれぞれにおいてヤスミン監督とは何だったのかを考えてみたい。

第1セッションでは、ヤスミン監督を輩出したマレーシアにおける映画制作の現状を、その

複層性に注目して検討する。「マレー映画の父」と称される P.ラムリーの没後、マレーシアの映画業界は長い停滞に陥っていると一般に理解されている。確かに、国産映画の保護と振興のためマレー語以外の言語の使用を制限した「マレーシア映画」公認制度のため、公認の「マレーシア映画」では民族混成状況をはじめとするマレーシア社会のさまざまな側面が十分に表現できず、このことがマレーシア映画の停滞を招いているという批判がある。その一方で、劇場で一般公開される公認の「マレーシア映画」のほかに、自主上映や国際映画祭などで上映されるインディペンデント系の作品や、特定の民族や地方を対象にビデオ CD で販売されるテレムービーと呼ばれる作品もある。とりわけ、撮影・編集の技術が普及した 2000 年代以降には、マレーシアのインド系住民が制作したマレーシアのインド系住民を対象にした作品や、サバ州を舞台にサバ州住民によって作られた作品などが多く作られ、いずれも劇場では公開されずにビデオ CD として特定の民族間や地方で流通している。また、何宇恒（ホー・ユーハン）や陳翠梅（タン・チュイムイ）のように、国内の劇場での公開を前提とせずに作品を作って国際映画祭に出品する監督や、蔡明亮（ツァイ・ミンリャン）や林家威（リム・カーワイ）のように制作の拠点を国外に置き、各国の映画製作者との協力・連携により作品を作る監督もいる。このセッションでは、マレーシア国外に活動の場を

積極的に求める監督たちや、従来ほとんど目が向けられてこなかったインド系やサバ州の作品を紹介することを通じて、今日のマレーシアの映画業界の複層性を捉えてみたい。

第2セッションでは、第1セッションで見るとように複層的なマレーシア映画業界にあって、各層の特徴を取り入れながら作品を作り上げ、6つの作品を遺して世を去ったヤスミン監督とは何だったのかを、2人のパネリストを迎えて映画史とマレーシア社会のそれぞれの側面から捉えてみたい。

まず、東京国際映画祭「アジアの風」プログラム・ディレクターとしてヤスミン作品をはじめから日本に紹介してきた石坂健治氏に、映画史におけるヤスミン監督およびヤスミン作品の位置づけとその意義をお話しいただく。2000年代に始まるマレーシア新潮の牽引者であったヤスミン監督の作品のアジア映画や国際映画祭における位置づけや意義を考えることを通じて、2000年代以降の世界が抱える課題に対して映画がどのように応答しうるのか、そしてその中でヤスミン監督やヤスミン作品はどのような意義を持つのかを考えてみたい。

続いて、マレーシア研究の立場からは、マレーシアにおける民族・混血者概念を研究している山本博之氏が、マレーシアの映画がこれまでマレーシア社会をどのように描こうとしてきたのかを概観した上で、ヤスミン作品に現れるマレーシア社会を読み解こうとすることを通じて、マレーシア社会が抱えてきた課題に対してヤスミン作品がどのように応答を試みてきたかを考える。

ヤスミン作品を映画史とマレーシア社会の双

方から捉えようとすることで、世界が抱える課題とマレーシアが抱える課題の接点としてのヤスミン作品の意義が浮き彫りになるだろう。このことは、ヤスミン作品への理解を深めることにとどまらず、国外とのつながりを維持したさまざまな人々から構成され、それ自体が1つのグローバル的な混成社会として成り立っているマレーシア社会への理解を深める上でも有意義なものとなるはずである。

第1部「マレーシア映画の複層性」

【報告1】

「マレーシアのタミル語映画を概観する」

深尾淳一（映画専門大学院大学）

マレーシアのインド系住民の大多数を占めるタミル人の中では、インドで製作されたタミル語の映画が絶大な人気を誇っている。一方で、マレーシア国内でも、きわめて低予算ではあるが、タミル語による映画がつくられている。インド製のタミル語映画には、量質ともに圧倒的におよばないながらも、マレーシアでタミル語映画の製作が行なわれるのはなぜだろうか。マレーシア製のタミル語映画について概観しながら、マレーシアのインド系住民にとってのタミル語映画の意味を考えてみたい。

【報告2】

「サバ州のテレムービーに見る「陸の民」と「海の民」」

山本博之（京都大学地域研究統合情報センター）

マレーシアのサバ州には、ビデオCD（VCD）で売られているテレムービーと呼ばれる映画がある。サバ州以外では存在がまったく知られて

いないが、とりわけアブバカル・エラ主演のコメディ・シリーズは大人気を博し、第一作の『オラン・キタ』は発売から 10 年を経てもサバでは知らない者がいないほどである。このシリーズにはカダザン系の「陸の民」と外来ムスリム系の「海の民」が登場する。いくつかの作品の内容を紹介しながら、アブバカル・エラ主演作品で描かれる「海の民」と「陸の民」の関係を考えてみたい。

50 年のあり方を模索していた時期にあたる。混成社会マレーシアの歩みの中にヤスミンとヤスミン作品がどのように位置付けられるのかを考えてみたい。

第 2 部「ヤスミン・アフマドとは何だったのか」

【パネリスト 1】

「ゼロ年代の世界映画とヤスミン・アフマド」

石坂健治（東京国際映画祭「アジアの風」部門
プログラミング・ディレクター／日本映画大学
教授）

2001 年 9 月 11 日のアメリカ同時多発テロの
のち、異文化間の融和や共生のビジョンを描く
映画作家たちが登場した。マレーシアのヤスミ
ン・アフマド監督はその代表的な存在で、6 本
の長編劇映画と多数のテレビ CM を創作し、51
歳の若さで急逝した。ヤスミン作品を初期から
日本に紹介してきた立場から、21 世紀の世界映
画の状況のなかでヤスミンを位置づけてみたい。

【パネリスト 2】

「ヤスミン・アフマドを生んだマレーシア」

山本博之

ヤスミン・アフマド監督は、マハティール政
権が幕を閉じた 2003 年に長編劇映画の制作を
開始し、「1 つのマレーシア」を掲げるナジブ政
権が幕を開けた 2009 年に世を去った。これは、
マレーシアが独立以来の 50 年を振り返り、来る